KBS
ケイビーエス株式会社
www.kbsjapan.com
【社内報ナルゲ】
날개（ナルゲ）とは韓国語で翼（つばさ）を意味します。

날개 nalgae

vol.56
January 2023

謹賀新年

コロナ禍を乗り越えて！

皆々様のご健康とご多幸を
お祈り申し上げます。

2023年　元旦

ケイビーエス株式会社
代表取締役　高　允　男
社員一同

（2021 年 12 月、徳島県日和佐にて撮影）

会社の歴史・働く人の歴史

僑文社・ケイビーエスに集った人たち

石川　亮太
（立命館大学経営学部教授）

ケイビーエスには、故高仁鳳会長が1968年に会社の経営に当たるようになってから現在まで、多くの制作物やそれにまつわる資料が保存されています。私は2021年からそれらの整理をさせていただいています。こうした資料からは、ケイビーエスの事業の歴史とともに、そこに関わった多くの人びとの歩みや思いが浮かび上がってきます。昨年の『ナルゲ』55号では、1971年から1996年まで在職された鄭炳采さんのお話を通じてケイビーエスの歩みをご紹介しました（「ハングル印刷から多言語印刷・翻訳へ」）。今号でも引き続き、私が関心を惹かれたいくつかのエピソードをご紹介したいと思います。

●僑文社草創のころ

もともとケイビーエスは、ハングルの活版印刷を中心とする僑文社という会社でした。在日韓国人のニーズを中心に、仕事は次第に増えていましたが、当初はなかなか社員が定着せず、高仁鳳さんとお連れ合いの林芳子さん（現専務）のお二人で切り回していた時期もあったようです。鄭炳采さんが入社されたのはその頃で、導入したばかりの手動写植のオペレーターとして活躍されました。高仁鳳さんの日記には、「今では彼は僑文社にとっていなくてはならない存在になった」（1975年9月）と記されています。

1974年には鄭炳熏さんが入社されました。鄭炳熏さんは大阪生まれの在日韓国人二世で、ソウル留学から戻ってきたところでした。版下の切り貼りから始まり、1982年にハングル電算写植システムが導入されると、『朝鮮語大辞典』（角川書店、1986年）の組版に従事されました。もともと語学好きの活字好き、僑文社の仕事も韓国語のブラッシュアップに役立って、仕事しているのか勉強しているのか分からなかったよ、と話して下さいました。1985年に退社してからは、夢だった世界旅行を果たした後、コリアボランティア協会のスタッフとして、高齢者や障がい者の介護に力を尽くしてこられました。

鄭炳采さんや鄭炳熏さんのほかにも、当時の僑文社には、在日韓国人の文化や言葉に関心を寄せ、それぞれのテーマを持って社会活動に取り組んでいる方が何人もいらっしゃったようです。在日韓国人を取り巻く環境が今より厳しかったこの頃、数少ないハングル印刷所であった僑文社が、そうした人びとを惹きつけていたのではないかと思います。

●ハングル入力の担い手

1980年代半ばからパソコンが普及し、ハングルのワープロソフトも登場すると、僑文社ではこれを印刷に取り入れて、作業効率のアップを図りました。複数のパソコンで同時に入力作業を進めるため、パート・アルバイトを含めて、社員はさらに増えました。

●1988年1月 会社の前で

鄭炳熏さんのオモニ（お母さん）である朴禮和さんも、ワープロの入力で長く活躍されたお一人です。戦前に渡日した一世世代で、社員からも「オモニ」と親しまれた朴禮和さんの生い立ちの記は、ご自身で描かれた愛らしいイラストとともに、『マダンの児――韓国と日本の空の下で』（2018年）として、ケイビーエスから出版されています。

一方でこの頃には、日韓関係の緊密化とともに、韓国からの新規渡航者が増えていました。ケイビーエスのハングル入力でも、こうしたニューカマーの女性たちがパートやアルバイトとして活躍するようになりました。日本に来られた経緯は様々で、商社マンや留学生のパートナーもいれば、在日韓国人の男性と結婚するために渡日した女性もいたそうです。慣れない異国での暮らしのなかで、母語が飛び交い、同じ境遇の女性たちが集う僑文社での時間は、仕事であるのと同時に貴重なリフレッシュの機会でもあったかもしれません。

●マック導入と多言語化

僑文社は1989年末に株式会社となり、同時にケイビーエスと改称しました。この改称について、高仁鳳さんには「ハングルだけではなく、もっと多くの言葉に仕事を広げたい」という気持ちがあったようです。その後の会社の歩みは、その通りになりました。

ケイビーエスではそれまでもPC9801型のパソコンを使っていましたが、1991年にアップル社製のパソコン、マッキントッシュを導入しました。マックの愛称で親しまれるマッキントッシュは、アメリカで印刷工程の革命的な効率化を実現していました。マックでは日本語やハングルだけでなく、タイ語やベトナム語など、多様なアジア言語を扱うことができ、高仁鳳さんの考える多言語化にはぴったりのツールでした。

●1991年11月 倉敷方面社員旅行

とはいえ社内にマックを使える人がいたわけではありません。高仁鳳さんは、ちょうどアルバイトに来ることになった韓国の留学生、高暎子さんにマックを勉強してもらうことにしました。高瑛子さんは文学部の学生で、マックはもちろん、パソコンに触ったこともなかったそうです。そんな高瑛子さんに、高仁鳳さんは、ほかの仕事はさせないで、マックの解説書を読んだり、講習に行ったりして操作を習得するよう指示しました。忙しい社内で勉強ばかりしていることを申し訳ながる高瑛子さんに、高仁鳳さんは「今はこれが一番大切な仕事なんだから」と励ましたそうです。その甲斐あって高瑛子さんは、マックによる組版作業の貴重な戦力となりました。『ナルゲ』創刊号（1992年4月）を、編集長としてマックで組版したのも高瑛子さんです。今は故郷の済州島に帰り、文化振興の仕事をされている高瑛子さんは、当時の思い出を電話で懐かしそうに話して下さいました。

●1995年1月 事務室にて

マックの導入を機に、ケイビーエスでは、1992年頃から、語学書や旅行案内書などをさまざまな言語で制作するようになっていきました。さらに組版・印刷だけでなく、翻訳も手掛けるようになりました。そうすると、これを入力する人が必要になります。たまたま通りかかって声をかけてきた人が、東南アジアの文化に関心があり、知り合いのタイ人留学生を紹介してくれるなど、偶然の出会いも重なりながら、ケイビーエスでは中国や東南アジアなど、さまざまな国から来た人たちが仕事をするようになりました。

この頃の高仁鳳さんは、ケイビーエスでアルバイトをする留学生が住むための寮を作ろうと考えていたようです。今もそうですが、保証人のいない留学生が宿舎を探すのは簡単ではありません。かつて高仁鳳さん自身も、学校に通うため、韓国から大阪に一人で渡ってきました。寮のアイデアは実現しませんでしたが、高仁鳳さんはそうしたご自身の過去を振り返りながら、留学生が安心して暮らせる場所を作りたいと思っていたのではないかと思います。

橋文社・ケイビーエスで働いた人たちの数は正確には分かりませんが、延べでいえば数十人を下らないのではないでしょうか。過去の資料を整理し、多くの方のお話を伺いながら、会社の歴史はそこで働いた人たちの歴史でもあることを改めて感じています。

●2018年5月 会社の前で

KBS研究論文、（1）（2）完成

ケイビーエス㈱は、韓国語活版印刷「橋文社」からスタートした。故高仁鳳会長は、印刷の刷り取りを「作品集」としてスクラップブックに保存していた。170冊を超えるスクラップ、スクラップできない冊子や記念誌などが残されていた。

2021年夏より石川亮太先生の指導のもと、刷り取りなど資料の整理が始まった。始めるにあたり、先生から資料調査について、1.調査の現況、2.資料の意義　3.資料の課題　4.保存の方針　5.当面の作業等の説明があった。

特に、2.資料の意義については、家族や会社の記憶を継承する拠り所となることはもちろん、初期の活版による韓国語制作物に始まり、1980年代の電算化、さらにDTPによる多言語印刷に移行するまでの制作物が継続的に残されていることから、在日韓国人のコミュニティを基盤とするマイノリティ・ビジネスが、ニューカマーの多様化に積極的に呼応して発展していった過程を示す例として、歴史的な意義が高いことを強調された。さらに個々の制作物自体も、韓国人をはじめ在日外国人の状況を映し出す資料として保存に値するとのことだった。

石川先生は毎週のように来社して社員たちと共に資料整理に当たられた。それをもとにKBSの歩みを調査し、元社員や関係者にもインタビューし、次の2つの研究論文として発表された。

●1960～70年代の大阪における在日コリアン印刷業
— 橋文社・ケイビーエス株式会社の歩みから（1）—
（『立命館経営学』第61巻第2号　2022年7月）

●ハングル専門印刷から多言語印刷・翻訳業への展開
— 橋文社・ケイビーエス株式会社の歩みから（2）—
（『立命館経営学』第61巻第4号　2022年11月）

※立命館大学HPからダウンロードできます。

立命館学術成果リポジトリ（https://ritsumei.repo.nii.ac.jp/）
検索窓に「ケイビーエス」と入力。

アメリカ

Working as Consultant for Drama “PACHINKO”

ドラマ「パチンコ」の監修を終えて

サンフランシスコ大学　社会学部　専任助教授　Shin Hwaji 愼 和 枝

I often receive random inquiries from strangers. In the United States, college professors are public figures whose contact information is readily available on college websites. I often hear from students who have read my work or journalists who wish to interview me about Japan. One day in the summer of 2008 when I opened my computer, I found an email titled “TV adaptation of PACHINKO.” Immediately, I figured it was about the New York Times best-selling novel about Zainichi Koreans by Korean American novelist Min Jin Lee. The email was from Ms. Soo Hugh, the renowned screen writer and executive producer of the Apple TV drama series, “PACHINKO.” She wanted to talk to me about Zainichi Korean issues as she prepared to write a script for the show. I was a little hesitant because I had not yet read the novel.

I knew how popular and acclaimed this novel was in the United States. President Obama listed this novel as one of his favorite books. Many people who read this novel asked me what I thought of this. But I always dodged those questions. I could not easily bring myself to read a novel about a family’s trauma which, with parallels to my own, was a little too close to my heart. I doubted that someone who has never lived in Japan as Zainichi Korean would understand or represent us fairly. Besides, I have so many books that I have to read for my research and classes. Why would I want to pick up and read a book that I have little desire or interest in?

However, when this inquiry came from a TV producer, I knew I had to respond. After all, there aren’t many Zaincihi Korean scholars in the United States. As soon as I read her email, I ordered the novel on Amazon and responded to her email, with a simple lin… “Sure, let’s talk soon.” I finished the novel in five days.

After I read PACHINKO, I found myself feeling very mixed about it. I was immediately immersed into the story line about first generation Zainichi Koreans and I could see my own grandparents in these characters, which brought tears to my eyes. However, I could hardly relate to the third generation Zainichi Korean characters who should supposedly have much more in common with me. I found the latter half of the story very dull and uninspiring. I did wonder where this mixed reaction came from. I wanted to discuss this with the screenwriter and producer who was about to visualize this novel.

Ms. Hugh and I hit it off immediately. We are close in age and have similar aged children. We have a stark difference… she grew up in the U.S. while I did in Japan … and we both came from immigrant families. I candidly shared my feelings about the novel and responded to her numerous questions about Zainichi Korean history.

アメリカの大学で働いていると、突然、見ず知らずの人からメールが来ることはよくある。私が過去に出版した論文を読んで質問をしたいという学生や、日本のことについてインタビューをしたいというジャーナリストなど多種多様なメールが来る。2018年の夏、コンピューターを開けると「小説パチンコのテレビ化」という表題のメールが目に飛び込んだ。ニューヨークタイムズでベストセラーになったコリアン系アメリカ人小説家ミンジン・リーが書いた在日コリアンの小説「パチンコ」のことであることはすぐにわかった。このドラマのプロデューサーのスー・ヒューさんからのメールで、脚本を書くにあたって、私と話をしたいとのことだった。「困ったな」と思った。実は、この時点で、私はこの小説をまだ読んでいなかったからだ。

この小説が全米で大変高い評価を得て、話題になっていることは知っていた。オバマ大統領もお気に入りの小説だと挙げていた。この本を読んだ知人から感想を聞かれたが、のらりくらりと誤魔化していた。この小説の題材があまりにも自分に近過ぎて、楽しめないだろうと思ったのと、在米コリアンの作家が在日コリアンの心の内を忠実に表現できるわけがないと思ったので全く読みたいとは思わなかった。平生、研究や授業のために読まねばならぬ本が山積みになっているので、読みたくない本をわざわざ手に取る気にはなれなかった。

しかし、テレビのプロデューサーからの連絡を受け、アメリカで在日コリアンの研究する学者の端くれとして、無視するわけにもいかない気がした。急いでAmazonで本を注文し、「近日中に、お話をしましょう」とだけ返事をした。そこから、一気に私は小説を読み終え、ヒューさんと話をすることにした。

小説を読み終えて、すごく心が動くところと、全く心に響かないところがあることに戸惑った。小説の前半の戦時中の話には吸い込まれた。一世の祖父母の姿が重なり、涙が出そうになった。その一方で、自分と同じ三世の話には全く共感・自己投影できず、正直つまらなかった。こんなバラバラな印象を持った小説はこれまで日本語でも英語でも読んだことがなかった。「このバラツキはどこからくるんだろう?」という疑問をプロデューサーのヒューさんにぶつけてみようと思った。

プロデューサーのヒューさんとはすぐに意気投合した。歳も近く、子供の歳も近い。在日・在米の違いはあるが、お互い移民の子として育った境遇は似ていた。率直に、彼女に私の小説への感想を述べ、彼女からのたくさんの質問に答えた。

Since this initial phone conversation, we kept in touch. When I went to New York City for work the following year, we decided to meet up in person. At a cafe in midtown Manhattan, we talked about so many things related to Zainichi Koreans and Korean culture in general. She was eager to learn and absorb everything I shared with her. She is in tune with her emotions and sometimes, I could see tears linger in her eyes as I shared some difficult struggles that Zainichi Koreans endured in Japan.

Ms. Hugh asked, “Is there anything you do not want or do want me to do as I work on the representation of Zainichi Koreans in this drama?”

I paused and then responded, “I would love it if the characters spoke the authentic language…or rather dialect. We, Zaincihi Koreans, were deprived of many important elements such as our ethnic names and language. While we are marginalized, we also embrace the local community and its culture that we were born into. That includes dialect. If you were to portray Zainichi Koreans living in Osaka, I would like them to speak Osaka dialect like I do.”

As she listened to my response, she looked a little worried and said, “It is not easy to find actors who could speak Japanes… let alone its local dialect.”

Hollywood is an industry dominated by White Americans. In recent years, its racial and ethnic bias was problematized. There are very few films and dramas that have an all-Asian cast. Only a handful of Asian producers and filmmakers are recognized in the industry. The number of female Asian producers is even smaller. Thus, I could only imagine her worries.

“I do not want you to portray Zainichi Koreans as Yakuza or cheap gang members. It is a very common negative stereotype against Zainichi among Americans and Japanese,” I continued.

The truth is that I had a long list of “wants” and “don’t wants” but I figured it is not my place to share my list with her. So I simply made these two points and wished her success before I said goodbye to her.

In the following year, the global pandemic started. Production got delayed and her team had to give up filming the show in Japan. Eventually, Ms. Hugh asked me to join the team as a content and cultural sensitivity consultant. I agreed to help her. When I watched the network cut during the editing stage, I noticed that the main characters spoke Osaka dialect and realized she did take note of what I requested in our meeting in New York.

Unfortunately, due to the non-disclosure agreement, I cannot share exactly what I did for Ms. Hugh and her show here.

In 2022, when Apple TV released the first Hollywood produced drama series about Zainichi Koreans globally, I was nervous and excited. How will the world respond and react to the show? I wondered. Unfortunately, the show did not score any Emmy nominations but it received very positive reviews in the U.S. and the rest of the world. Some show critics even criticized the Emmys for not nominating the drama PACHINKO.”

Personally, I still felt a little unsatisfied by the ways non-Zainichi Koreans represented the experiences of Zainichi Koreans. However, I do believe that this drama, along with the original novel, made a very important contribution to the Zainichi community as they promoted the global awareness of our existence and history in such an unprecedented way. I look forward to more reaction and awareness rising from the future series of this show.

その後、彼女とは時折連絡を取り合う仲になる。私がニューヨークに仕事で行ったときに、彼女と初めて対面することになった。ミッドタウンのカフェで彼女といろんな話をした。在日コリアンのドラマを作るにあたり、ヒューさんは私の話を本当に興味深く、勉強熱心に聞いていた。在日コリアンの苦労のエピソードを聞いて、涙もろい彼女の目が潤んでいた。

ヒューさんが「このドラマで在日を忠実に表現するにあたって、これだけはやって欲しい、やってほしくないことってある?」と突然、聞いてきた。私は、少し考えて、こう答えた。

「忠実にして欲しいのは、言葉、いや正確には方言。私たち在日は大事なものを剥奪されてきた。本名・母国語など。日本で差別されるけれど、生まれ育った地域社会に愛着もあるのが在日だと思う。だから大阪で暮らす在日コリアンを表現するなら、登場人物は大阪弁を話して欲しい。」

すると彼女の顔が曇った。「ハリウッドで、日本の方言まで話せる役者を見つけるのって簡単じゃない……」と彼女は不安げにつぶやいた。

ハリウッドは圧倒的に白人中心の世界である。近年、ハリウッドの人種・民族的な偏狭さが問題視されていた。アジア人だけのキャスティングの映画・ドラマは少ない。アジア系のプロデューサー、特にアジア女性プロデューサーとなると、その数はとても少ない。なので、ヒューさんがもつ苦悩は容易に読み取れた。

「やってほしくないのは、在日をヤクザ・チンピラ風に描くことかな……。在日にそういうイメージをもつ日本人や韓国系アメリカ人って結構いてるから。」とだけ答えた。

本当は、もっとやってほしくないこと、やって欲しいことはあったが、私が言うのもお門違いではないかと思い、私はこの２点だけを伝え、ドラマが成功することを祈願し、別れを告げた。

その次の年、パンデミックが始まり、撮影は大幅に遅れ、日本で撮影することができなくなったと聞いた。そのうちに、ヒューさんから正式にコンサルタントとしてチームに入って欲しいと要望を受け、私は引き受けることにした。編集・仕上げ段階の作品を試聴した時、役者たちが3カ国語を話し、それぞれの方言を話していることに気づき、ニューヨークでの彼女との会話を思い出した。

Apple社との契約で、コンサルタントの内容を口外することはできないので残念ながら、ここでは詳細は述べることはできない。

2022年にハリウッドプロデュースで在日コリアンがテーマのドラマが放映された時は、私も興奮した。世界が在日コリアンの歴史についてどんな反応を示すのだろうか?という関心と不安があった。残念ながら、アメリカのドラマの賞の最高峰であるエミー賞へのノミネートはされなかったが、全米ではとても高い指示と評価を受けていた。ノミネートされなかったことを批判する評論家もたくさんいた。

個人的には、在日コリアンでない人が演じる在日コリアン像は、やはりずれている所もあり、物足りなさが残った。しかし、在日コリアンの生き様を世界中の人が知るきっかけを作ったこのドラマや小説は、在日コリアンにとっては大変意味のあることだろうと思う。今後、このドラマのシーズンが進むにつれ、どのような反応・評価が出るのかを静観したい。

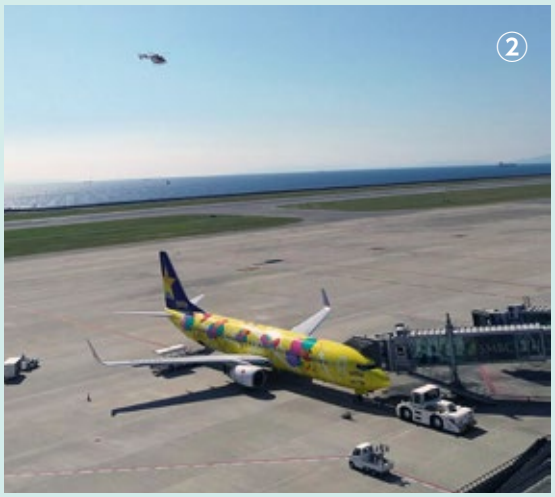
いい日旅立ち 佳日启程

翻訳部　呂　咏鴻

みなさん、まず、写真をご覧ください。

写真①は明石海峡大橋をくぐり抜けて淡路島へ向かう船で撮った景色です。9月下旬のある日、子どもを船に乗せてあげたかったので、家族で明石市と淡路島を結ぶ高速船・淡路ジェノバラインを乗りに行きました。淡路島岩屋港に上陸し近くの小さい鳥ノ山展望台に上ってきました。天気のいい中、高速進行中のフェリーから眺める、明石海峡大橋の迫力ある姿と、気持ちのいい潮風を満喫してきました。コロナ第七波の終焉の頃、海路を含めた日帰り旅行ができて楽しかったです。

写真②は10月23日に神戸空港の展望室から撮った景色です。快晴の日に、子育て仲間の友達家族と一緒に「空の日イベント2022」を開催した神戸空港へ遊びに行ってきました。駐機場に収まっていた可愛いスカイマークの特別塗装機「ピカチュウジェット」を初めて見ました。離陸して高く飛んでゆくヘリコプターを一枚の写真の中におさめることができました。子どもたちは久しぶりに近距離で飛行機やヘリコプターを見て、離着陸の瞬間の大迫力にわくわくし、「飛行機に乗って中国に行きたい！」と言っていました。



さあ、この二つの写真を見て、何か感じませんか？旅に出たいと思いませんか？ 私は『いい日旅立ち』という歌を思いつきました。子どもの言った通りいつか海外へも旅立ちしたいな……。

私はコロナ禍の1年目のナルゲ（Vol.54）の未来への展望に関する記事で、欧米豪とアジア諸国の人々はコロナ禍が明けたら、海外旅行へ一番行きたい国は日本だと言及しました。それから2年経って、今年の調査データを見れば、同じでした。現在「コロナ収束」というより「ウイズコロナ」は共同の認識となっています。2022年10月から、日本は約2年ぶりに訪日旅行を再開しました。入国制限が撤廃され、訪日外国人の個人旅行が解禁されてから円安を追い風に、各空港は賑い外国人観光客が戻ってきたそうです。

欧米豪からだけではなく韓国や香港・台湾、タイなどのアジアの国々からの観光客の姿が日本国内で見られるようになってきています。ただ、かつて主力だった中国人はゼロコロナなどの中国特有の社会的事情で、まだ出口が見えず解禁される日は遠そうです。

一方、2022年4月入国制限緩和以来、留学、経営管理、研修生・技能実習生などの中長期滞在ビザで来日した中国やベトナムをはじめとしたアジア人は増えてきています。これらの人々は日本での生活に言葉の壁があります。また、欧米豪在住の大勢の新しい中国人移民も日本旅行が好きだそうで、第三国から出発して日本に訪れる可能性があります。今後、日本国内では多言語翻訳の新しい需要が増えるだろうと思います。私たち海外在住の中国人の帰省も含めた世界中の人々が、自由気ままに**「いい日旅立ち」**ができる日が来ることを願っています。

首先，大家请看照片。

照片①是在穿过明石海峡大桥向淡路岛驶去的船上拍下的风景。9月下旬的某日，为了让孩子乘一次海上的船，我们全家去乘了连结明石市与淡路岛的高速船“淡路 Jenova Line”。在淡路岛岩屋港上岸并登上了附近的小山——鸟之山展望台。绝佳的天气中，尽情享受了从高速前进的渡船上远眺令人震撼的明石海峡大桥雄姿和沐浴拂面而来倍感舒爽的海风。在日本第七波新冠疫情进入尾声的时候，来了一场含有海路交通的一日游，十分开心。

照片②是10月23日从神戸机场的展望室拍出去的一景。又是晴朗的一天，和育儿朋友一家一起去了举办“2022天空之日活动”的神戸机场玩。停机坪上停着的天马航空公司的“皮卡丘”主题涂装客机还是第一次看到，好可爱。起飞后向高空飞去的直升机正好和下面的飞机同框拍了下来。孩子们久违了地近距离看到飞机以及直升机，震撼于飞机起飞着陆的瞬间场面，兴奋雀跃，并说着“我想乘飞机去中国！”。

那么，看了这两张照片，您有何感想呢？有没有想去旅行呢？我想到了《佳日启程》这首歌。正如孩子所说的真想什么时候启程去海外啊……。

我在疫情头一年的社内报（Vol.54）的展望未来的文章中提到了欧美澳和亚洲各国的人们疫情过后海外旅行最想去的国家是日本。两年过去了，再看今年的调查数据，还是相同的结果。现在与其说“疫情结束”，倒不如说“与病毒共存”已经成为了普遍共识。2022年10月起日本时隔两年重启入境游。解除入境限制和解禁外国人赴日自由行旅游后，加上日元贬值，各机场好不热闹，外国游客又回来了。

除了欧美澳，韩国、港台、泰国等亚洲国家来的游客身影在日本国内又能看到了。只是，曾经是主力的中国人由于清零等中国独特国情，仍看不到尽头，解禁之日似乎尚远。

与此同时，自日本2002年4月份入境限制放缓以来，持留学、经营管理、研修生・技能实习生等中长期签证来日本的中国及越南等亚洲国家的人日渐增加。这些人中有不少在日生活存在着语言障碍。此外，据说居住在欧美澳的许多中国新移民也喜欢来日本旅游，有从第三国出发入境日本的可能性。我想，今后日本国内多语种翻译新的需求会有所增加吧。也祈盼着，包括我们海外中国人省亲在内的全世界所有人能自由自在地**“佳日启程”**的那一天早日到来。

鷹の祭典 in 京セラドーム大阪

制作部　稲木隆文

我が家では、息子の影響で“福岡ソフトバンクホークス”を応援しています。

去年から対オリックス戦を数試合京セラドーム大阪へ観に行っていたのですが全敗でした。アウェイ戦だしオリックスが優勝したシーズンだから「仕方がない」と言い聞かせ……。

2022年はホークスが年に1度だけ大阪で主催する試合「鷹の祭典 in 京セラドーム」に参戦しました。

日時は8月29日、対戦相手は千葉ロッテマリーンズ、ペナントレースも終盤戦、この時ソフトバンクホークスは首位、千葉ロッテマリーンズは5位でした。

「ついにホークスの初勝利が見られる」と家族みながワクワクしながら球場へ乗り込みました。

グッズを買い込み、入場者プレゼントの限定ユニフォームをもらい、練習する選手の写真を必要以上に撮り試合開始……。

結果は、5回まではリードしていたのですがリリーフが打たれ反撃もなく3対2で敗れてしまいました。

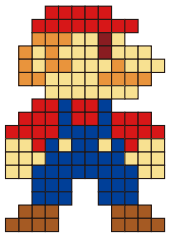
ホークスの主催試合だったので、試合後イベントがド派手に行われましたが、気持ちも乗らず家路につきました。

嫁と娘は始球式をつとめた「なにわ男子メンバー」を生で見ることができたので満足していましたが、ホークスの勝ち試合を観る日は来るのか来ないのか……。

ユニバーサルスタジオへ 6年ぶり 行ってきました！

総務部　松本佳代子

背がほとんど変わらない



この3年間ほぼ遠出をしなかったのですが、あまりにもどこにも子どもを連れて行っていなかったので、久しぶりにユニバーサル・スタジオに行ってきました。

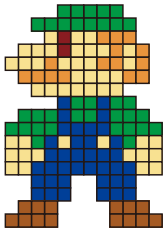
娘ももう中学生。かたや私はアラフィフです。ジェットコースターに乗っても、「キャー⤴⤴！」なんて声はだせません。

「ヒィ〜〜！」と鶏の首をしめたような声しかでませんでした（泣）。声量にも老いってあるのですね……。

最近できた、スーパー・ニンテンドー・ワールドも行きましたが、なにをどうすればよいのか全然わからず、娘が操作するカートの助手席にボーっと乗っているだけ……。

子どもが大きくなった分、母は年を取るのだなぁと、実感したお出かけとなりました。

やる気はあるが体力がない



ごあんない

故高仁鳳会長の没後 10 年にあたり、下記の集いを開催いたします。「ハングル印刷から多言語印刷・翻訳へ――僑文社・ケイビーエスの歩みから――」の講演、映像・独唱・思い出を語る等のプログラム、また高会長の生い立ち、活版印刷から電算写植、多言語ＤＴＰへの歩みなどパネル等で展示いたします。どうぞご参加くださいますようお願いいたします。

■没後 10 年 高仁鳳の軌跡 ― ソウルと大阪の狭間で ―

・日時：2023 年3月4日（土）展示開場 12 時　受付 13 時
　　開演 13 時 30 分～ 16 時 30 分
・場所：大阪市立生野区民センター（リゲッタＩＫＵＮＯホール）
・資料代：1000 円　高校・大学生 500 円
・主催「没後 10 年高仁鳳の軌跡」実行委員会

年末年始休業日のお知らせ

過ぐる年も格別のお引立てとご愛顧を賜り、まことにありがとうございました。
年末年始を下記の通り休業させていただきます。
新しい年も、なにとぞお引き立てのほどよろしくお願い申し上げます。

12 月 29 日(木)～ 1 月 4 日(水)

1 月 5 日(木)午前中営業、1 月 6 日(金)より平常通り営業いたします。

【個人情報の取扱について】

この社内報「ナルゲ」は、お取引先･外注先･協力関連先の皆様にお送りしております。
ケイビーエス株式会社は、お客様の個人情報を合理的かつ適切に管理し、業務の目的以外に使用いたしません。また、法令に基づき開示が義務づけられるなどの特段の事情がない限り、第三者に開示・提供することはありません。
当社が管理するお客様自身の個人情報について、お客様から内容確認、修正・更新・削除の要請を受けた場合には、お客様の意思を尊重し、合理的な範囲で必要な対応をいたします。
当社は、お客様の個人情報の保護に関する法令・規範を遵守すると共に、その取り扱いについては、適宜その見直しと改善に努めます。

発行日　2023年1月1日

編集／発行　ケイビーエス株式会社
〒544-0033
大阪市生野区勝山北2-16-17
電話　06-6716-5665
FAX　06-6711-2804
E-mail　info@kbsjapan.com
URL　http://www.kbsjapan.com/

編集後記

●今年のナルゲ編集長が私と決まった時、すごく悩みました。ページの構成も自分の記事も表紙も。今回は日本とアメリカの大学の先生から記事が寄稿され、それぞれ約2ページ分の量になり内容が充実するな、とひとまず安心しました。私の記事は今回1ページですが、コロナ禍で本当に平凡な日々を送っているので、全然アイディアがわかなかったのですが、ようやく何とか書けました。書き終わった時には達成感がありました。社員の皆さん、ご協力をありがとうございました。さあ、今年も頑張りましょう。（呂）

●前回のナルゲでは「2022年度中に飲み薬が開発されればいいな」と書きましたけど、ワクチン接種はすすめど治療薬が登場するには遠い感じです。それでも世界はwithコロナに移行し、日本も徐々にそちらへ進んでいるように感じます。どうかこの流れが止まりませんように。（稲木）